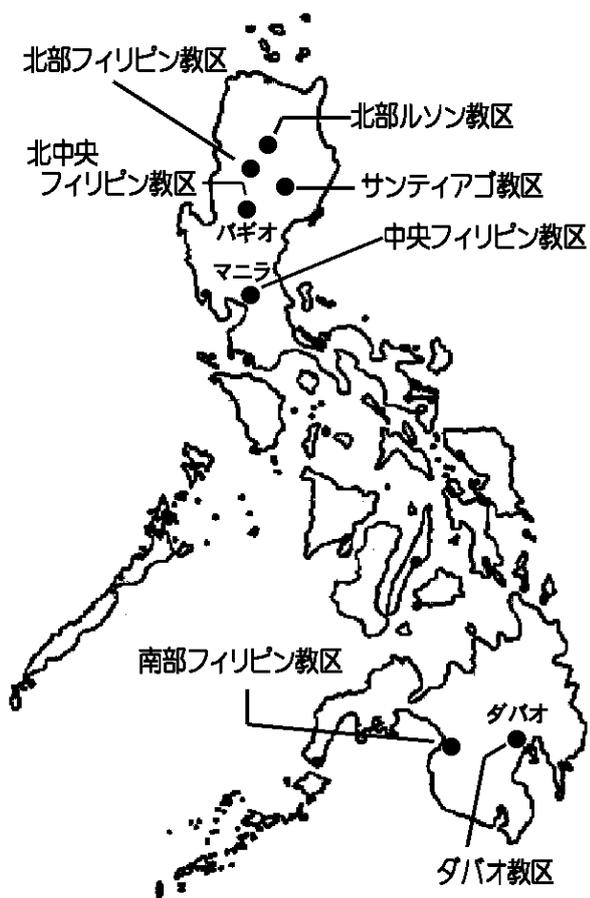


2018 Philippine Work Camp

フィリピンとの掛け橋





フィリピン聖公会 中央フィリピン教区
 Episcopal diocese of north central philippines

◎ 2018 参加メンバー

団長： 司祭 長田吉史

沖縄教区： 執事 上原成和、 司祭 高英敦、 黄マリア

神戸教区： 野間陸、 長田尽希、

九州教区： 司祭 李相寅、是枝洋典

<フィリピンワークキャンプ感想文>

団長：司祭 長田吉史

私がこれまで参加したフィリピンワークキャンプでは、タナイ州サントイネス、バンリック及びジャンボリー、そしてヌエバエシハ州パラヤン市といった、フィリピンの中央都市であるマニラに比べ、田舎の地域を訪れ、そこではフィリピン中央教区に属する教会をベースにしたワーク活動と教会や地域の皆さんとの交流を通して、様々な体験をしてきました。例えば、電気・水道・ガスがなかったり、乏しかったりと言った状況の中で、また日本と比べて何でもすぐに手に入る環境がない中で、本当の豊かさとは何かということについて考えさせる体験をしてきたように振り返っています。

しかし今年 2018 年はカローカン市という、これまで訪れた環境とはいろいろ違う場所、しかもフィリピン中央教区が何年もかけて宣教活動が続けてきている場所を訪れました。そこにはもともと教会がなく、最初はマンゴーの木の下で聖餐式を始めたということでした。今はフィリピン中央教区が一階建ての建物を借りて日曜日には聖餐式を、平日はその地域の、幼稚園にも学校にも通えない、貧しい子どもたちのため、特に 2 歳から 7 歳くらいの子どものための教育施設となっています。このような教育施設や地域の皆さんに開放された教会のことを行政も注目しており、少なからずの支援もあるようです。このような場所で、今年 2018 年のフィリピンワークキャンプは行われ、個人的には宣教活動の一つの示唆が与えられたように感じています。例えば、その地域での宣教活動の担当者である、一人の司祭の姿です。彼が最初からこの活動をしてきたのかどうかは定かではありませんが、しかしこの地域に住む約 100 世帯の住民たちみんなと声をかけ合える関係にあり、言葉では言い尽くせない「人とつながる姿」を感じたのでした。もちろんそれ以外にも、今の私たちの教会の働きに投げかけているようなこともあり、確かにフィリピンと日本、それぞれの環境があってもまったく同じにして考えることはできませんが、それでも日本に住む私たちに対して何らかのきっかけを与えてくれたと受け止めています。それは教役者だけでなく、参加者それぞれがそれぞれの体験をしてきたように思います。教会の働きのため、人とのつながりのため、個人の日常生活のため、その他、フィリピン中央教区の宣教活動に参加しながら、地域の方々と共に祈り、共に奉仕し、そして共に交わる中で、きっと新しい体験をし、日本での日常生活や教会生活に活かせる何かを得てきたらうし、私個人的にはそういう機会となりました。

◎ 沖縄教区：執事 上原成和、司祭 高英敦、黄マリア



<フィリピンワークキャンプ感想文>

沖縄教区：執事 上原成和

2月20日から27日まで、フィリピンワークキャンプに行ってきました。このキャンプは神戸、九州、沖縄の3教区の合同プログラムとして毎年行われているものです。私はこのキャンプに約10年前に参加して以来2回目の参加で、初のスタッフとしての参加となりました。キャンプ参加者はスタッフを含め計8名（神戸3名、九州2名、沖縄3名）で、その半数が初のフィリピン訪問でした。今回キャンプでは、ルソン島ケソン市ノバリチェス地区にあるフィリピン中央教区（EDCP）の新教区センターで宿泊しながら、今回の主なワーク地である聖十字教会のある村（コミュニティー）に通いました。ワークの内容は、村で行われている教会建築の作業のお手伝いと、ECCDプログラム（Early Childhood Care and Development：EDCPが行っているプログラムで、特に未就学児やまたその親たちを対象とした健康、教育、自立のための支援活動）に参加させて頂きました。教会建築では、村の人たちと協力して、本当に暑い中、手作りと思われるようなスコップや鶴嘴を使って穴を掘ったり、石灰を含んだ石や砂を組み合わせセメントを作ったりしました。ECCD また子どもたちとの関わりでは、各教区が用意してきたプログラム（歌と踊り、折り紙やお箸、スタンプ遊び、ゴミ拾いゲーム）や現地スタッフも交えて色んな遊びを一緒に行いました。子どもたちの明るい笑顔と気兼ねなく接してくれる姿は私たちに大きな力と励ましを与えてくれました。他にも、聖ルカ病院という大きな病院からのボランティアの方たちが村の人たちの歯の治療を行うデンタル・ミッションのとても衝撃的な（！）お手伝いをしたり、同じくECCD プログラムが行われているミラモンテ説教所という別地域を訪れたりもしました。どれもこれも刺激的な1週間でした。苦しい現実の中にあっても、いつもそこには笑顔と互いが互いを思いやる姿があり、とても感動いたしました。これからもフィリピンワークキャンプに多くの方が関心を寄せてくださいますように、お祈りください。

<フィリピンワークキャンプ感想文>

沖縄教区：司祭 高英敦、黄マリア

今度九州、沖縄、神戸3教区が協働で行っているフィリピンワークキャンプに参加することが出来ました。特に今年は、年齢関係なく参加者を募集しましたので、私の夫婦が参加することになったのです。福岡空港で各教区から来た5名と出会って総8名がフィリピンに向かって出発しました。初めてのフィリピンの旅なので胸のときめきと恐れを持って出発したのです。

今回のワークキャンプの課題は、フィリピン中央教区が貧しい人たちが集まって暮らしている所のホーリクロス教会で行っている ECCD (Early Childhood Care and Development) クラスの参観とその教会を新しく建築する現場でのワークでした。

一日目のオリエンテーションと現場に移動して子供たちと遊ぶに時間を持って何をしたら良いのかについて相談する時間を持ちました。

二日目からは本格的な活動に入りました。午前中沖縄教区の一行は ECCD クラスに入って子供たちと前もって用意して持って行った賛美の歌を歌いながら簡単なモーションをしながら子供たちと楽しい時間を持ちました。

ECCD プログラムは意味の通りまだ小学校に入っていない子供の為のプログラムでした。このプログラムによって多くの子供たちが学校に通うようになったと聞きました。そこに住んでいる子供たちは、学校も遠いし、保護者も関心がないし、学校に通うことも嫌がって一日中遊んでいたのです。

午後には、教会建築の現場に行って建物の基礎を造る為の穴掘りの作業をしましたが、碌な道具がありませんでした。うちで使っていた古いスコップ一つだけあっても簡単にできる仕事なのに…と思いながらスコップの柄を見ると「US ARMY」と書かれていました。米軍が1992年フィリピンから撤収する時残したスコップかも知れません。しかしフィリピン全地域がこの様子ではないと思います。道に走っている車を見ると高級乗用車が多かったのです。しかしながらその教会建築の現場では、みんな手で、ボロボロの道具を持ってやっていたのです。最初はびっくりしてこれでどうすると思いましたが、体を動かしながら「祈祷は労働であり、労働は祈祷だ。」というベネディクトの教えが思い出しました。そして、建築の全体なことをコントロールする人も鉄筋の仕事まで素手で黙々しているのを見て教会の建物は道具ではなくお祈りで作るものだと感じました。

教会の建築は日曜日を除いて月曜日の午前まで、中央教区の主教様まで加わってやって基礎のコンクリートまでは終わらせました。どのような形の教会が建てられるのか楽しみにしています。

お昼の食事が終わると子供たちのお遊びのじかんでした。おもちゃや遊具が全くないから一緒にゲームをするしかありませんでした。それも体を動かさなければならぬことだから教会建築の仕事も、子供たちとの遊ぶことを肉体労働でした。

特に土曜日には、「Help in DENTAL MISSION」がありました。活動が始まる前には、子供たちに歯ブラシ使い方ぐらいやるのではないかと思いましたが、歯医者さん4人と看護師5人がいろいろ道具を持ってきて本格的なデンタル活動が始まりました。私とマリアは、歯を抜く道具を片付けるパートを担当しましたが、ペンチやミラー等いろんな種類の道具がありました。その日治療を受けた人数が300名ぐらいでした。そこのほとんどの人が治療を受けたのです。歯が痛くても歯科に行けなかったのは一人の1回の治療費が5人家族の一日分の食費になるので、痛くても我慢するしかなかったのです。

ワークキャンプのメンバーとして参加しましたが、何か役に立ったのか分かりません。かえって迷惑をかけたのではないのかと思います。私個人にとっては、フィリピン中央教区が行っている社会宣教の一面を経験することが出来て良かったと思います。沖縄教区も見えないところで苦しんで暮らしている人に対する関心を傾ける宣教プログラムが開発したらと思って望みます。

◎ 神戸教区：野間陸、長田尽希



<フィリピンワークキャンプ感想文>

神戸教区：野間陸

4度目のフィリピンワークキャンプへの参加となりました。今回訪れたのは、市街地の近くにある300人ほどの人々が生活する小さな集落でした。フィリピン中央教区の教区センターに宿泊させてもらい、毎日その集落に通いました。

今年私は、フィリピン中央教区による衝撃的な宣教活動に共に参加することになりました。その集落にはまだ教会はなく、現在は学校の建物を借りて聖餐式や教会活動を行っているという状況でした。基本的なワークはその集落での教会建築の作業でした。その中で1日だけプログラムに「デンタルミッション」と書かれた日がありました。日本でそのプログラム表をもらった段階ではどんなことをするのか全く想像がつかず、「WHOとかユニセフがよくやっているような歯磨き講習のようなことをするのか」と漠然と思っていました。そして当日、まだ朝早い学校に私たちキャンパーが着いたのとほぼ同時に、フィリピンで2番目に大きな病院(聖公会系列の病院)から歯医者と看護師が4~5人到着しました。よくよく話を聞けば、「今日一日でこの集落全員の歯の治療と手術を行うから、その助手をよろしく」ということでした。キャンパーの中には、抜歯時の麻酔用の注射針を洗ったり、痛み止めの薬を処方していた人もいました。歯を磨くということ、そして歯医者自体も主には金銭的な理由によって身近でないフィリピンでは、歯のない子どももたくさんいます。学校に置かれた6つの椅子のそこかしこで、(おそらく)もう抜かなければどうしようもない歯が抜かれていって、血まみれのバケツがそこら中に散らばっていきます。心から、いろんな意味で衝撃的な光景でした。後から聞けば、その日に治療をした250人の治療費・人件費は全てボランティアによってまかなわれたそうです。「教会の活動ってどんなことができるのかなあ」などと悠長に日本で考えていた自分が恥ずかしくさえなりました。

教会が存在する大きな意義の一つに、「誰かの居場所となる」ということがあると思っています。現地で切実に必要とされていることに教会の活動として応えていく。そして、どこまでも地域に密着していき、人々が教会に集うようになる。その力強い宣教の姿勢はデンタルミッションの取り仕切りを担当していた司祭を迎える人々の態度から、はっきりと見て取れました。子どもも大人も「Padi! Padi! (司祭)」と言って彼の手を取って話を聞いてもらおうとします。帰国してから考えると、そういった超地域密着型の宣教や教会活動というのは、日本の過去の姿であり、未来の姿でもある様に思えました。例えば、私の母教会である姫路顕栄教会であれば、この広畑町に教会を建てよう、と最初に決めた時にはそういった地域に密着していく活動が必要となったはずでしょう。そして、現在信徒の減少・高齢化が叫ばれているキリスト教教会において、教会が取り壊しになる、ということも想像できないことではないでしょう。その最後の歯止めとして、有力な抵抗力となるのは地域の人々とのつながり、誰かの居場所になっているかどうか、ということだと思います。そう遠くない将来に、(歯医者はやらないとしても)そういった地域密着型の教会活動というのは必要とされていくのではないかと、またそもそもそれは人と人とのつながりが教会を問わず希薄になってしまっている現代において、常に必要とされていることなのではないか、と思いました。教会の活動の無限さを感じることができた、素晴らしい1週間でした。教役者の先生方、そしていつも私たちをあたたく迎えてくれるフィリピン中央教区の皆様に感謝します。

<フィリピンワークキャンプ感想文>

神戸教区： 長田尽希

今年2月20日（火）から27日（火）までの8日間、フィリピンワークキャンプに参加しました。今回の参加者は、神戸教区3名、九州教区2名、沖縄教区3名の計8名でした。僕は、英語もタガログ語も話せないで、どのようにコミュニケーションを取ろうかと、最初は不安がありました。しかし今回訪れた HOLY CROSS CHURCH の皆さんがやさしく接してくださったので、いつの間にかそんな不安はなくなっていました。

僕が今回一番心に残ったのは、「分け合う」ということです。例えば、ご飯を食べる時は自分の家庭だけでなく、近所の人や友だちと分け合って一緒にご飯を食べている、というのを見ました。また、この教会がある村には井戸が一つしかありません。この村にどれ位の人が住んでいるのかはわかりませんが、だいたい100世帯が暮らしているそうです。それ位たくさんの方がいるのに井戸は一つしかなく、乾季に入るとその井戸が干上がってしまうので、その時はみんなで協力して高いお金を出して水を買って、大切にそれを分け合っている、と聞きました。このような「分け合う」という姿は、家族の間では見ることができても、近所の人や友だちとの間では、あまり見られません。時々ならそういうことはあっても、いつもではありません。そして、その「分け合う」という姿は子どもたちの間でも見られました。ここには、日本のように遊ぶものが何でも揃っていません。あっても、買うことができません。でも、子どもたちは自分たちが楽しむこと、それは友だちと一緒に楽しむことをいっぱい知っていて、いつも明るく、楽しく遊んでいました。ここにも、「分け合う」という姿があると思います。僕はこのキャンプで心に残ったこの「分け合う」ということを、これから活かしていきたいです。そしてまた、フィリピンの皆さんにもう一度会いに行きたいと思っています。



◎ 九州教区：司祭 李相寅、是枝洋典



<フィリピンワークキャンプ感想文>

九州教区： 司祭 李相寅

壁をなくす宣教（九州教区報はばたく4月号に載せた文）

私は昨年続き、今年も、フィリピンワークキャンプに参加しました。昨年はフィリピンの山の中の小さな田舎町で行われましたが、今年は、フィリピンの首都、マニラにある貧民村でワークプログラムが進行されました。主なワークプログラムは、フィリピンの中央教区が、その貧民村に教会を建て、また子供たちのための教会学校に、一緒に参加することでした。

私は今回のワークプログラムに参加しながら、私の未熟な判断かもしれませんが、そこに本当に多くの壁が存在するということを感じました。その貧民村を取り巻いている高く、頑丈なコンクリートの壁、その村の家の間にもある壁を見ながら、まるでそこの人々の考え、心が壁を通じてみられるようでした。もちろん、その壁はその村、村人だけの問題ではなく、私たちの間でもありうるものであり、状況によって、いつでも、壁はもっと強くしかも高くなる可能性があるわけです。

一方、フィリピン中央教区の貧民村に向けた宣教活動を眺めながら、結局、キリスト教、教会の宣教は世の中の壁を低くしたり、壁をなくすことだということが分かるようになりました。

そしてその壁を低くして、なくすことはその壁の内部のみで解決できない、外部から叩き、関心が必ず必要だという事実も分かるようになりました。フィリピン中央教区の宣教活動、また我々の参加が少しでもそんな役割を担った感じでした。その村を代表する村長が、うちの村が外部からの関心と注目を受けたのは初めてだと言い、これから、良い村を一度作ってみようと、涙で決意を語りました。

4月はイエス・キリストの復活日がある月です。イエス・キリストの復活は、世を超えている、世の外の神の国が世の中に積極的に介入し、深くに入ってきたことです。それを経験して感じた人は世、人間が作った壁が要らないもの、愚かなものに見えたのでその壁をなくす人、クリスチャンになったのです。今回のフィリピンのキャンプを通じて、キリスト教、教会の宣教、またクリスチャンは世の中、私たちの中にある壁をなくすことだとしてより直接的に体験することになりました。